
 学 会 記 事

第 6 回新潟 GHP 研究会

日 時 平成 16 年 2 月 14 日 (土)
午後 2 時 30 分～
会 場 新潟大学医学部有壬記念館

I. 一 般 演 題

 1 頭痛, めまい症状を主とする鑑別不能型身体
表現性障害にパロキセチンが奏功した 1 例

小野 信・鈴木 雅子・北村 秀明*
澁谷 太志*・染矢 俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

身体表現性障害は, 十分な医学的説明が見出せない身体症状を主訴とする精神疾患である. その身体症状や訴えは, 患者に持続的な苦痛を与え, 社会的あるいは職業的機能の低下をもたらすほど重篤である.

治療は一般的に長期にわたることが多いが, 十分なエビデンスを持つ治療法はきわめて少ない. 気分障害や不安障害が併発した場合は, 気分症状や不安症状に対する薬物療法が行われることが多いが, 身体症状そのものを標的とした薬物療法の有効性に関する十分なデータは存在しない.

今回われわれは, 頭痛, めまいといった身体症状を主体とした鑑別不能型身体表現性障害の 69 歳の女性入院患者に対し, 支持的精神療法とともに薬物治療を行なった. 入院前は, 身体症状とそれに伴う二次的な抑うつ症状を呈しており, 医療機関を頻回に受診し, 点滴加療を受ける状態で, 前医よりスルピリドが処方されていた. 入院後にミルナシプランに置換したところ, 身体症状が増

悪し, また二次的な抑うつ症状も増強した. その後 selective serotonin reuptake inhibitors (SSRI) の一つであるパロキセチンに置換したところ, 身体症状が有意に改善し, 二次的な抑うつ症状もまったく認めなくなった. 本症例では, 鑑別不能型身体表現性障害に対して, ミルナシプランは無効であったが, パロキセチンが有効であったため, 薬物治療に関して若干の考察を加え, 報告する.

 2 高い知能レベルを維持しながらも, 職業上の
著しい不適応を呈した脳外傷の 1 例

長谷川直哉・北村 秀明*・染矢 俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

症例は 36 歳の男性. 7 年前, 29 歳の時, 自動車事故に遭い, 後頭部を強打し, 3 日間意識不明の状態が続いた. 意識回復後, 両下肢の麻痺が認められたがりハビリにより回復し, 復職した. しかし生徒の顔が覚えられず, 授業がうまくできなかった. 学校側からも教職を遂行する能力に欠けると判断され, 雑用しか任されないようになった. また「喜怒哀楽の感情がなくなった」と自覚する一方で, 生徒を必要以上に怒鳴りつけたり, 「生きていてむなしい」と死に場所を求めて放浪することがあった. 精神医学的評価を行うため当科に入院した. 病棟では目立った行動異常は認めなかったが, 以下の検査結果を得た.

【神経画像検査】

MRI : 左前頭葉から側頭葉底部にかけて脳挫傷巣が認められた.

SPECT : 脳挫傷巣に一致した血流欠損とその周辺部の血流低下が認められ, 他の部位の血流は保たれていた.

EEG : 左前頭部～頭頂葉優位に spike が頻発している.

【神経心理学的検査】

HDS-R : 30 点

WAIS-R : VIQ ; 126, PIQ ; 118, TIQ ; 125

ウェクスラー記憶力検査 : 遅延再生能力のみに

低下が認められた。

BADS (遂行機能障害症候群の行動評価) : 正常下限の成績

RBANS : 言語性の遅延再生の著しい障害が認められた。

【考察】病歴や検査所見より本症例は左前頭葉を中心とした損傷により遅延再生に限定した記憶障害, 実行機能障害及び情動制御の障害を呈したと考えられる。職場等での著しい機能低下にも関わらず, WAIS-R, HDS-R では機能低下を反映する所見はまったく得られなかった。またより実生活に近いとされる BADS 等の検査においても障害を十分に反映しているとは言い難く, 前頭葉損傷の症状把握の困難さを示す症例であった。

3 Quetiapine により陽性・陰性両症状と薬剤性高 PRL 血症が改善した統合失調症の 1 例

熊田 智・阿部 亮・高田理恵子
細木 俊宏・染矢 俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

統合失調症の治療には抗精神病薬が用いられるが, 特に初回エピソードにおいては非定型抗精神病薬が第一選択薬として位置づけられている。現在, 非定型抗精神病薬の中で日本において使用できるものには risperidone, perospirone, quetiapine, olanzapine があり, 従来の定型抗精神病薬に比べて D2 レセプターに対する親和性は低く, 5-HT₂ レセプターに高い親和性を示す。そのため陽性症状のみでなく陰性症状にも高い効果を示すと言われている。その中でも quetiapine は他の非定型抗精神病薬に比較しても, D2 レセプターへの親和性が低いため錐体外路症状が出現しにくく, 血中 PRL 濃度を上昇させないという特徴があると報告されている。今回, 我々は risperidone 投与では陽性・陰性症状の改善が十分でなく, 薬剤性の高 PRL 血症を呈した統合失調症の患者に対し, quetiapine への置換が有用であった症例を報告する。

本症例は 18 歳の女性で, 入院当初は体感幻覚のため食事が摂れず解体症状も著明であった。また意欲の低下, 感情の平板化, 思考の貧困化などの陰性症状も認められた。まず risperidone (Max 6 mg/日) により治療を開始したが, 症状の改善がほとんどみられず, 薬剤性の高 PRL 血症 (142ng/ml) を認めた。そのため quetiapine (Max 300mg/日) への置換を行なったところ, 体感幻覚が消失し食事を取れるようになり, また解体症状も改善した。陰性症状も次第に改善を認め, 他患との交流を認められるようになり活動性が高まった。血中 PRL 濃度も正常値まで低下し, 他の副作用が出現することもなかった。その後も状態は安定しており, 積極的に外泊を繰り返すようになり, 退院となった。

4 顕著な陰性症状にペロスピロンが有効であった統合失調症の 1 例

横山 裕一・阿部 美紀・江川 純
染矢 俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

Perospirone と risperidone は共にドパミン (D₂) 受容体遮断作用に加えてセロトニン (5-HT₂) 受容体遮断作用を併せ持つ serotonin-dopamine antagonist (SDA) として分類される新規の抗精神病薬であり, 統合失調症の陽性症状のみならず, 陰性症状にも有効性が高いとされている。また, haloperidol のような従来の抗精神病薬と比較して, 錐体外路系副作用が少ないという特徴を持っている。

今回我々は risperidone 投与中に陰性症状の悪化をきたし, perospirone への置換がその改善に有効であった統合失調症の 1 症例を経験したので, BPRS の陰性症状の項目の評価をふまえ, 若干の考察を加えて報告する。

症例は 43 歳の女性。X-23 年 (20 歳時) に発症し haloperidol や chlorpromazine などの薬物療法によりほぼ寛解状態に至り, 文章校正の仕事に